

『ブラック・ボーイ』の家母長制下の女性達の会話 — 翻訳作品における黒人間の役割語の一考察 —

西岡 聖子[※]

Women's Conversations under the Matriarchy in *Black Boy*:
A Study of Black Role Language in Japanese Translation

Masako NISHIOKA

Abstract

Role language is a hypothetical language that evokes a specific persona of the speaker. According to Kinsui (2014), the foreign character's speech is translated into "Japanese local dialect." Furthermore, in conversations between black people, the main character tend to speak standard Japanese and the supporting characters speak "local dialect."

Richard Wright (1908-60) was successfully used as a part of New Deal policy and culture project by the US government during the Great Depression in the 1930s and is credited with raising American black literature to a global position. "Black Boy" (1945), describes his personal history, when he lived a life of hardship in his childhood, confronted the prejudice of white people, and moved to the North.

In Japan, Takashi Nozaki, who translated a number of American writers such as Poe, Fitzgerald, Salinger, and Steinbeck, translated *Black Boy* into Japanese in 1962.

We examine Nozaki's *Black Boy* as the target text of this research and focus on the conversation between the main character, Richard and women in the matriarchal family (grandmother, mother, aunts), and how they were translated into Japanese. Then, the background of the language is considered from a socio-linguistic approach to verify the role of "Yakuwarigo" as mentioned above.

Keywords: Yakuwarigo, African-American literature, translation

キーワード：役割語, 黒人文学, 翻訳

※ 本学文学研究科英語英米文学専攻

1 序論

役割語とは、話者の特定の人物像を想起させる仮想的な言葉遣いであり、言語学者の金水敏が命名したものである。登場人物を容易に想起させる利便性がある一方で、ステレオタイプな偏見や差別意識を伝えてしまう場合もあると金水敏（2014:184）は述べている。特に、欧米の映画やテレビドラマなど黒人が登場した場合、その多くに東北系の「田舎ことば」が充てられて和訳されるという。また、複数の黒人が登場する物語では、主人公の黒人は標準語、脇役の黒人は「田舎ことば」を使用することが指摘されている。

本研究の目的は、馴染みの薄い黒人の役割語が、実際に日本語にどう翻訳されているのかを観察し分析するのに加え、さらに中村桃子（2013:79）が主張する「登場人物はその人物像に適したことばを使うことが大切」という観点からも、黒人女性が、役割語を使うことで日本語による黒人女性のイメージ作りや物語の進行にどう役立っているのかを検証してみたい。

リチャード・ライト（Richard Wright, 1908-60）は、1930年代の世界恐慌時のアメリカ政府のニューディール政策の一部として、作家を積極雇用し出版物を作成するという文化プロジェクトで見出され、アメリカ黒人文学を世界的な地位に高めたとして名を刻んでいる。彼の自分史を綴った『ブラック・ボーイ（Black Boy, 1945）』は、幼少期から苦難の生涯を送り、白人と対峙し、北部へと移動した19年を綴ったものである。日本語訳は、ポー、フィッツジェラルド、サリンジャー、スタインベックなどが著した数々のアメリカ文学を翻訳した野崎孝が1962年に出版したものをを用いる。

ここでは、『ブラック・ボーイ』を題材とし、特に黒人家族で顕著であった家母長制下家族の中心となった女性たち（祖母、母親、叔母）の発話と、彼女たちと主人公リチャードとの会話を抽出し、それがどのように日本語に翻訳されたのかを論じる。そして、そこで使用されたことばの背景を社会言語学的アプローチで考察し、役割語がどのように関わっているのかを分析する。

原文である Source Text（以下 ST）は *Black Boy*, Richard Wright (1945) とし、日本語翻訳文である Target Text（以下 TT）は、『ブラック・ボーイ —— ある幼少期の記録 —— 上、下』野崎孝日本語訳（1962）とする。

この物語の主人公はリチャードという男子で、ミシシッピ州の農場に生まれた。祖母以前は全員奴隷であったが、親の転地に伴い南部を転々とし、19歳の時に北部に移動する。本編はリチャードがミシシッピ州で生まれ育った幼少期から、北部シカゴへと移住した19年間の自伝である。地文はすべて主人公によるモノローグ形式で（“ ” でない部分）、父は“My father”、母は“My mother”と記されている。

同書の日本語訳本は上下巻に分かれており、上巻は幼少期の家庭環境、下巻はハイティーンになり社会で白人と対峙した状況を描いており、日本語訳での白人＝標準語、黒人＝田舎言葉（金水、2014）という役割語に関する例は下巻に含まれる。黒人間の役割語についての本研究では、黒人家族のアイデンティティと家庭環境がどのような言語形式に反映されているかに焦点を当てるため、上巻の幼少期に注視する。同人種間で、男性不在の家母長制家庭にならざるを得なかった環境の中で、主人公リチャードと家族の女性達がどう関わったか、また家族の中でのそれぞれの女性の立場を会話から分析する。

2 分析方法

分析の方法は、英文のSTから、上記対象者と主人公リチャードとの会話で、リチャードの個人史における原体験となった顕著なもの(殺人や暴力、差別的法規制などのエピソードにまつわる会話)を拾い出し、立場の違い(家族を支える女性である祖母マーガレット、教育を施す女性である叔母アディ、扶養される女性である叔母マギー)という観点から話し方の相違を考察する。そして、日本語TTにおいて、それぞれどう日本語訳されたかを観察する。特に性差を表す一人称代名詞の使用を主として、特定の対話においては二人称、三人称を観察するとともに、終助詞にも着目する。

分析するにあたって、登場人物の相関関係を以下の表1にまとめる。

表1 『ブラック・ボーイ』の登場人物の関係

登場人物	主人公リチャード			
章	3-1	3-2	3-3	3-4
登場人物	祖母マーガレット	母エラ	叔母マギー	叔母アディ
人物背景	元奴隷で、彼女の父親は奴隷主の白人と思われ、外見はほとんど白人。産婆。9人の子供を育てた。夫は北軍に忠臣したが手違いで恩給をもらえず、病気がち。娘に難あれば駆けつけ、面倒を見る。教会の熱心な信者でその教義を家族に強いる。祖父も祖母も文盲である。	リチャードと次男レオンをもうける。家族でテネシー州へ引っ越すが、その先で夫が家に帰らなくなり、家計を支えるため移転して仕事を続け、無理がたたって卒中になる。子供達と実家に戻り、祖母たちの世話になる。息子にとっての精神的支柱。	母エラが特に懇意にしていたすぐ下の妹。夫は酒場を経営しているが、彼はある夜白人によって殺害され、マギーは遺産も手にすることなく実家に戻る。この事件は、リチャードの対人関係への強い影響を及ぼす。男性を通して存在する扶養された立場の女性。	祖母の末娘。新卒で帰省して、地域で宗教学校を開講、初めて生徒を受け持つ。リチャードは生徒でもある血縁関係にある。信仰告白しないリチャードに激しい敵対感情を持つ。

3 会話分析

3-1 祖母マーガレット

まず、リチャードの祖母のマーガレットのセリフに見られる役割語について観察する。祖母マーガレットは、家賃を浮かせるため、小学校の教師である女性エラを下宿させている人物である。エラがリチャードにグリム童話から削除された残酷童話『青ひげ』を読んでいた時の話セリフが以下である(TT: 64, ST: 39)。

「なにをしゃべってるんだ、この不良娘！」祖母がどなった。「おれの家で、そんな悪魔つきの話はやめてもらおう！」

“You stop that, you evil gal!” she shouted. “I want none of that Devil stuff in my house!”

ST では、否定は動詞を修飾せず、名詞を修飾している。自身を強く主張するため、直接的な要望 “want” は否定形にせず、指摘の対象物 “Devil stuff” を “none” と否定している。祖母は、文盲ながらも『青ひげ』の話は関知しており、自身の信仰から相反する有害な物と考えているからだ。二人称 “you” のエラは子供を教育する教師であることをむろん承知しているが、家を司り、家庭で子どもに思想教育を施すべきは自身であることを強く認証している。

TT では、ST の最初の発話が、二人称が繰り返し強調されるのに対し、日本語訳では欠落している。これは意味上、“you” よりも “I” が立場が上であることを暗に示し、二人称はおろか、何者もの存在を認めないことを表している。もっとも一番主張したいのが二番目の発話であるため、一人称は「おれ」と強い男性一人称で、女性でありながらも、女性一人称に和訳されることなかったその根底には、性差を超越し、家での支配者は誰であるか、責任の所在を明確に主張している台詞である。

なお、「おれ」は、多くは男性に使用され、「俺」の方が「僕」よりも男らしく、日本語源広辞苑によると傲慢であるとされている。東北方言あるいは、中部農業地区では女性の一人称に使用される (2012) ものもであり、「俺」は強い男性性を表す。時折、「偉そう」「威張っている」という悪い印象を与える (Miyazaki 2004) ものもである。このことからマーガレットの「おれ」は方言とも考えられ、脇役は田舎言葉をしゃべる金水の主張をここで確認できる。また、ことばを使うことでアイデンティティを作り上げるといふ翻訳理論 (中村 2013) には、男性不在の家庭で、家庭の主であるという祖母の支配的人格がこの翻訳によって達成されていると言える。

3-2 母エラ

次に、母エラとリチャードの会話から、役割語がいかに使われ、変化しているかを観察する。

アーカンソー州に行く道中、ジム・クロウ法によって黒人席と白人席に分けられた汽車に乗り、その区別に疑問がわいたリチャードは、母親を質問攻めにする (77TT, 47ST)。

表2 母エラとリチャードの汽車内での会話 Richard=R, Mother=M

		TT	ST
1	R	じゃあ、なんだって、ばあちゃんは、 <u>おれたち</u> みたいな黒人といっしょに住んでいるのかな？	Then why is she living with <u>us</u> colored folks ?
2	M	おまえは、ばあちゃんが、 <u>おらたち</u> といっしょに住んでいるのがいやなのかい？	Don't you want Granny to live with <u>us</u> ?
3	R	いやじゃないさ	Yes.
4	M	じゃあ、なんでそんなことを訊くんだい？	Then why are you asking ?
5	R	わけが知りたいんだよ	I want to <i>know</i> .

6	M	ばあちゃんは、 <u>おらたち</u> といっしょに住んでいないかい？	Doesn't Granny live with <u>us</u> ?
7	R	住んでいるよ	Yes.
8	M	じゃあ、それでいいだろう？	Isn't that enough ?
9	R	しかし、ばあちゃんは、 <u>おれたち</u> といっしょに住みたいのかな？	But does she <i>want</i> to live with <u>us</u> ?
10	M	なんだって、ばあちゃんにきかないんだい？	Why didn't you ask Granny that ?
11	R	ばあちゃんは、じいちゃんと結婚して黒人になったのかね？	Did Granny become colored when she married Grandpa ?
12	M	馬鹿なことを訊くのは、いいかげんに止さないか！	Will you stop asking silly questions!
13	R	でも、そうなの？	But did she ?
14	M	ばあちゃんは、黒人になったんじゃない	Granny didn't <i>become</i> colored
15	M	生まれたときから今のような色だったんだ	She was <i>born</i> the color she is now.
16	R	どうして、ばあちゃんは、白人と結婚しなかったの？	Why didn't Granny marry a white man ?
17	M	それは、したくなかったからさ	Because she didn't want
18	R	どうしてかあちゃんは <u>ぼく</u> に話したがるんだい？	Why don't you want to talk to <u>me</u> ?

TTでは、金水(2014)の指摘する「主役は標準語、脇役は田舎言葉」という主張と同様に、主役のリチャードは、読み手からの自己投影を図るべく、標準語「おれ」、脇役の母親は役割語「おら」を使用。「おら」は「俺ら」のくだけたもので、東北、中部で使われる(日本語源広辞典 2012)。祖母の使用している、性別を超えた強い主張性の「おれ」よりも、母親はより親しみのある「おら」を使用しすることで、家庭での権力構造、つまりマーガレットの方がエラよりも強い立場にあるということがここで明らかになる。

作品を通して、母との会話が他の誰よりも長く、量的に見ても母子の強い結びつきが現れている。息子の質問内容が他者には聞くことがはばかれる、という心情が母親の態度から察することができるので、他者が介入しない場所で、母親にだけこっそりと聞こうとしている。しかし、母親は人種の話には直接的な回答を避けたいので、会話の辻褄が合わず、むしろ面白いずれが生じるのである。

R18で、それまでの祖母に関する人種の質問から、母対自分=子供の会話になると、一人称“me”は立場変化し、「ぼく」に変化する。「ぼく」は、男性の謙称で、字義としては「僕」は男の召し使いを指す(大辞泉 2012)ことから、ここで精神的支柱は母に依存しているということがわかる。

3-3 叔母マギー

次に、叔父が白人によって殺害されるという非常事態での叔母マギーの役割語を観察する。この件でリチャードに白人への強い恐怖を植え付け、黒人が社会へと向かうことは何を意味するのかを身を持って教えられるという重要なシーンでの会話である。

(リチャードの母に向かって)
「何か事故でもあったのか、あたし、見に行ってくる」
“I’m going to find out if anything’s happened.”
「どうか、神様、白人が悪さをしたんではありませんように」
“I hope to God the white people didn’t bother him.”
「うちのひとは、ピストルをおいていった。どんなことが起こるか、しれやしないよ」
“He didn’t take his gun. I wonder what could have happened?” (TT : 87, ST: 53)

TT では、一人称代名詞は「あたし」、使用される所有格は「うちの」であるが、これは「あたし」と同様、くだけた表現である一人称代名詞の「うち」から派生したと考えられる。急を要する場面で「あたしのひと」と発するよりも、「うちのひと」は瞬時に家族関係を示すことができる。くだけた表現で、肉親という親しみを持たせると同時に、扶養される不安定で弱い立場の女性を表現している。

なお、祖母マーガレットは前述のように、「おれ」を使用して他者に対して自身の支配権を主張するが、信心する対教会への発話では「神様は、あたしをお許しになるだろう」(238) というように立場を弱める一人称に変化している。家庭の中で絶対的であった祖母が、神に対しての祖母の態度が「あたし」の使用で弱体化しているというのに気づくことができる。

これは、まず人物背景の持つ意味ありきで役割語は働いており、登場人物は状況ごとに、物語に自然に馴染む、もしくは読み手のイメージ訴求しやすい役割語に変化していると言える。

3-4 叔母アディ

最後に、リチャードと叔母アディの会話から役割語の使用を観察する。時間の経過と背景の推移は地文で描かれている中で、役割語が使われている会話のみを拾い出す。

他生徒の食べた胡桃のかけらが床に落ちていたのを見て (TT : 171, ST : 104)

表3-1 リチャードと叔母アディの教室での会話 Richard=R, Addie=A

		TT	ST
1	A	教室で物を食べちゃいけないぐらい、 <u>あんた</u> だってしてるでしょう	You know better than to eat in the classroom
2	R	<u>ぼく</u> は食べやしません	I haven’t been eating
3	A	うそおっしやい！ ここは学校であるだけじゃない、神様のいらっしゃる神聖な場所ですよ	Don’t lie! This is not only a school, but God’s holy ground
4	R	<u>アディお婆さん</u> 、 <u>ぼく</u> の胡桃は、ちゃんとポケットの中に…	Aunt Addie, my walnuts are here in my pocket . . .
5	A	<u>わたし</u> は、ウィルソン先生です！	I’m Miss Wilson!

STでは、叔母アディは、家族間で使用している呼称“Aunt Addie”で呼ばせることを拒否。不正を正す以前に、学校という公の場で、教師の威厳を生徒に再度周知すべく、“I’m Miss Wilson!”と強く訂正を入れ、体面を保とうとする。

TTにおける二人称代名詞「あんた」は「あなた」のくだけた言い方である。叔母アディは終始一貫して田舎言葉は話さないが、少なくとも会話の導入では、家族内の親密でくだけた言い方「あんた」で始まる。おそらく他の生徒に対してはこのような調子を見せることなく、威厳と公平性を保つために「あなた」と呼んでいる可能性は高い。リチャードは、その語調を引き継ぐ形で、「アディおばさん」と反論すると、叔母アディはすでに感情的になっており「わたしは、ウィルソン先生です!」と声高に主張する。

以下、20に渡る会話の応酬のうち、STの会話の6つが動詞原形で始まる強い命令形(A3, A7, A8, A10, R15, R16)であり、文末に感嘆符“!”がついた会話は、ST、TTともに14にも上る。いかに強い感情と緊張感が漂っているかが理解でき、ここからついに暴力へと突入するに至る会話に発展してしまうのである。

床を汚した生徒の名前を告げずにいたリチャードに体罰を与える。

表3-2 リチャードと叔母アディ、体罰を与える会話

6	R	ぼくは何もしやしないよ!	I haven't done anything!
7	A	じっとしてるんだ! 手をお出し!	Stand still, boy! Hold out your hand!

鞭でリチャードの手を打つ。

表3-3 リチャードと叔母アディ、体罰後の会話

8	A	手を下ろして席に戻りなさい これがかたがついたと思ったら間違いですよ!	Put down your hand and go to your seat. I'm not through with you!
9	R	かたがついた? <u>ぼくはあんた</u> に何をしたというんだ?	Through with me? But what have I done to you?
10	A	黙っておすわり!	Sit down and shut up!

表3-4 リチャードと叔母アディ、帰宅後の会話

11	R	もう撲らせやせんぞ!	You are not going to beat me again!
12	A	おまえに行儀というものを教えてやる!	I'm going to teach you some manners!

兩人激昂のうち、リチャードはナイフを拾い上げた。

表3-5 リチャードと叔母アディ、ナイフ介入時の会話

13	R	さあ、これでも止めないか!	Now, I told you to stop!
----	---	---------------	--------------------------

14	A	そのナイフを放せ！	You put down that knife!
15	R	<u>おれ</u> に手を出すな。さもなきゃ切るぞ！	Leave me alone or I'll cut you!

アディはナイフを取り上げようと飛びかかり、兩人転げるように戦う。

表3-6 リチャードと叔母アディ、暴力が激化した会話

16	R	放さないか！	Leave me alone!
17	A	<u>この野郎</u> 、そのナイフをよこせ！	Give me that knife, you boy!
18	R	殺してやる！ 放さなかったら、殺してやる！	I'll kill you! I'll kill you if you don't leave me alone!"

祖母、母が台所に駆け込んできた。

表3-7 リチャードの母エラとリチャードの会話 M=Mother

19	M	リチャード、そのナイフを <u>かあちゃん</u> によこしな	Richard, give me that knife
20	R	でも、かあちゃん、 <u>おばちゃん</u> がぼくを撲るんだよ、なんにもしないのに、撲るんだ。 あんなひとに撲られてたまるもんか。どうなったって、かまうもんか！	But, mama, she'll beat me, beat me for nothing not going to let her beat me; I don't care what happens!

TTの会話の導入では、叔母アディはリチャードに対し、家族の延長である家族内の親密な言い方で始まる。その後体罰を与え、帰宅した後は「おまえ」(A12)に、ナイフを取り合ってから「この野郎」(A17)と変化する。「この野郎」のSTは“you boy”で、むしろ目上の者から目下に諭すような命令口調であるのに対し、TTは会話相手の呼び方によって感情の激化を増長させているのがわかる。“boy”(A7)は体罰を与える直前にもSTでは使われているが、それはむしろ翻訳されず、体罰を行う行為そのものを強調することに注視する。

叔母アディの一人称代名詞は「わたし」(A5)のみで、これは男性にも女性にも使用できる性差の少ない人称代名詞であるが、ここでは学校という公の場での叔母アディが、自身の立場を主張するためのフォーマルな言い方である。

リチャードの一人称代名詞は、原文ではいずれも“I”等の同一の形でありながら、学校では、家族であり、生徒という先生より弱い立場を認証する「ぼく」(R2, R4, R6, R9)、ナイフという武器を手にしてからは「おれ」(R15)に変化して強い男性性を主張し、母親が介入してからは子供としての「ぼく」(R20)に戻る。

リチャードから叔母アディへの二人称代名詞は、家族内の親密な言い方である「おばさん」(R4)を学校でも使用し、体罰を受けてからは「あんた」(R9)に、最後に母親には

三人称代名詞「おばちゃん」で訴えるが、ついには「あんなひと」(R20)に変化し、リチャードから叔母への見方が明らかに変化したのがわかる。リチャードと叔母、聞き手の関係が場面の変化に応じて、有機的に人称代名詞の使い分けに反映されている。

体罰を与える前の叔母アディの文末表現は「でしょう」(A1)、「おっしゃい」「ですよ」(A3)と女性言葉に翻訳されているが、体罰以降の暴力シーンに、女性言葉は一切見られない。暴力シーンは強さを示すため、弱さや優しさを含む表現のある女性語には翻訳されない。金水氏の指摘する「黒人間での役割の主従をつけるため主役は標準語、脇役は田舎言葉」もこの場では採用されない。弱い立場の性、マイノリティ人種という意識もここでは吹き飛ばすほどの、激怒という感情の変化を翻訳化している。

表4 まとめ：各登場人物の使用する人称代名詞

登場人物	主人公リチャード			
人称代名詞	普段は標準語「はく」、他者との力関係によって、強い男性性を示す「おれ」を使用			
方言	主人公は標準語で物語を語る			
登場人物	祖母マーガレット	母エラ	叔母マギー	叔母アディ
人称代名詞	一人称も終助詞も強い男性性を表す。だが、すべて田舎言葉である	会話量自体が一番多い。やや男性的で、親しみやすい田舎言葉	扶養され、不安定な立場のくだけた女性語	問題多き肉親を教育の名のもとに制圧するため、くだけた言い方から厳格な言い方を話す

4 結論

黒人作家リチャード・ライトによる自分史“Black Boy”の翻訳において、主人公は標準語、その他の黒人女性たちは、基本的には田舎言葉に翻訳されており、それらは役割語と言えよう。

祖母マーガレットのように誰よりも強い立場にある黒人女性は、強く傲慢とされる男性の一人称代名詞、そして田舎言葉に翻訳される。母エラは親しみあふれる田舎言葉を話し、その際の主人公の一人称代名詞は、男性の謙称になり、親密な親子関係である印象を翻訳から受ける。叔母マギーは、女性的でくだけた話し方に翻訳され、不安定で弱い立場を表現している。叔母アディは、家族間の気安い話し方から、公で体面を保つため、強い口調になり、その後、体罰を与え、家庭内暴力を引き起こすことになるが、一貫して田舎言葉も話さず、暴力シーンでは女性的な表現のない強い語調に翻訳された。また、状況の変化に伴って、主人公からの三人称代名詞が最後には他人を蔑むような言い方に変化し、最終的には家族関係が断絶されたことが翻訳された人称代名詞の選択からもわかる。

上記のように、金水氏が指摘した主人公が標準語、脇役が田舎言葉という黒人の役割語は依然として一定程度存在し、「日本人の<田舎ことば>に対するまなざしと、黒人に対するまなざしが重なり合う」(金水敏 2014) ことで黒人の描かれ方が成立していること

がわかる。

一方で、登場人物は関係性や状況ごとに、標準語でさえも変化をし、田舎言葉も多彩さを放っている。これは、物語に自然に馴染む、もしくは読み手のイメージ訴求しやすい役割語に変化していると言える。その翻訳の語り口は、翻訳者の卓越した翻訳技術によって、言語変種を豊かに描き出しているのである。

引用文献

- Miyazaki, Ayumi. (2004). "Japanese Junior High School Girls' and Boys' First-Person Pronoun Use and Their Social World." Ed. Okamoto Shigeko and Janet S. Shibamoto Smith, Oxford University Press.
- Wright, Richard. (1945). *Black Boy*, Harper.
- 金水敏 (2014) 『ヴァーチャル日本語役割語の謎』 岩波書店。
- 小学館大辞泉編集部編 (2012) 『大辞泉』 小学館。
- 中村桃子 (2013) 『翻訳がつくる日本語』 白澤社。
- 増井金典 (2012) 『日本語源広辞典』 ミネルヴァ書房。
- ライト、リチャード、野崎孝訳 (1962) 『ブラック・ボーイ —— ある幼少期の記録 —— 上、下』 岩波文庫。